日本新文典　下卷

3759
Fu10
資料室

42586
教科書文庫
4
815
51-1921
20000
41362

375.9
Fu10

資料室

文部省檢定濟
大正十年十二月二十日　師範・中學校國語科教科書

文學博士　藤村作
文學士　島津久基　共著

日本新文典

東京　至文堂

廣島大學教
41362
圖書

廣島大學圖書印

日本新文典　下卷

目次

品詞（下）
第一二章　助動詞の種類……一
練習　九八……四
第一三章　文語助動詞の活用及び接續……一〇
練習　九九……一四
同　一〇〇……一五
同　一〇一……一五
同　一〇二……一六
第一四章　誤り易き助動詞の接續……一六
練習　一〇三……一七

練習　一〇四……一八
同　一〇五……一八
同　一〇六……二〇
同　一〇七……二〇
同　一〇八……二一
同　一〇九……二二
同　一一〇……二二
同　一一一……二四
同　一一二……二四
第一五章　口語助動詞の活用及び接續……二五
練習　一一三……二八
同　一一四……二八
同　一一五……二九
同　一一六……二九
同　一一七……三〇

第一六章　活用連語……三一
練習　一一八……三二
同　一一九……三二
同　一二〇……三二
同　一二一……三三
同　一二二……三三
同　一二三……三三
同　一二四……三四
同　一二五……三四
同　一二六……三五
同　一二七……三五
同　一二八……三五
復習　五
練習　一二九……三七
同　一三〇……三八

練習……一三一……三八
第一七章　助詞(一)……三九
練習……一三二……四七
同……一三三……四七
同……一三四……四八
第一八章　助詞(二)……四九
練習……一三五……五四
第一九章　助詞の接續(一)……五四
練習……一三六……五八
同……一三七……五八
同……一三八……五八
同……一三九……五八
同……一四〇……五九
第二〇章　助詞の接續(二)……六三
練習……一四一……六五

同……一四二……六五
同……一四三……六六
同……一四四……六七
同……一四五……六八
復習　六
練習……一四六……六九
同……一四七……七〇
同……一四八……七一
第二一章　副詞……七一
練習……一四九……七四
同……一五〇……七六
同……一五一……七七
同……一五二……七八

文

第二二章　文の成分(一)主語述語……八〇
練習　一五三……八二
同　一五四……八五
第二三章　文の成分(二)補語附文主……八五
練習　一五五……九〇
同　一五六……九一
同　一五七……九五
同　一五八……九六
第二四章　文の成分(三)修飾語……九六
練習　一五九……九八
同　一六〇……一〇〇
同　一六一……一〇二
同　一六二……一〇三
同　一六三……一〇三
同　一六四……一〇四

第二五章　句及び節……一〇五
練習　一六五……一〇六
同　一六六……一一一
第二六章　文の種類……一一二
練習　一六七……一一六
同　一六八……一一七
同　一六九……一一七
第二七章　呼應附係結……一一八
練習　一七〇……一二一
同　一七一……一二三
復習　七
練習　一七二……一二四
同　一七三……一二四
同　一七四……一二五
同　一七五……一二五

練習　一七六……一二六
同　一七七……一二七
同　一七八……一二八
附錄　文法上許容ニ關スル事項

下卷目次終

東京大學圖書之印

日本新文典　下卷

文學博士　藤村作
文學士　島津久基　共著

品詞（下）

第一二章　助動詞の種類

【三九】　助動詞は單獨には用ゐられない。主に動詞の下に連つてその作用を助けるが、稀には體言や「なり」「たり」の場合）助詞に（「ごとし」の場合）結びつくこともあり、又助動詞が幾つも連結せられることもある。

【四〇】助動詞には次のやうな種類がある

受身の助動詞

一　受身の助動詞

犬(が)子供に打た(文語)る(口語)　受身・意味をふくむ
田舎者に道を尋ね(ら)る　られる

●受身の助動詞と同じ形が可能の意味を示すにも用ゐられる。又敬語に轉用せられることもある。

使役の助動詞

二　使役の助動詞

本を生徒に讀ま(文語)す(口語)　せる
過を改め(さ)す　させる
視察に赴か(し)む

●これも敬語に轉用せられることがある。

推量の助動詞

三　推量の助動詞

花(が)散る(文語)らむ(ん)　べし(べ)
花(が)散り(口語)だらう　でせう
花(が)散る(文語)らし(ら)　たでせう　らしい
散つ(口語)

●古文には「散るめり」「行かまし」のやうに用ゐられた「めり」(ラシイ、トミエル)「まし」(ダラウ)がある。

●「べし」は可能命令にも用ゐられる。又「べし」が良變の「あり」と結合して、「取るべからず」「言ふべからん(約りて「べけん」ともなる)」などいふこともある。又指定の「なり」と結びついて「なるべし」となることもある。

●未來の助動詞「む」(口語では「う」又は「よう」)を推量に轉用することも多い。

打消の助動詞

四　打消の助動詞

誰も知ら(文語)ず　ざり
誰も知ら(口語)ぬ(ん)　ない
誰も知る(ま)じ　まい(ナイデラウ)

●「じ」と「まじ」は推量の意味を兼ねてゐる。

願望の助動詞

五　願望の助動詞

〔明日の試合に勝ち〕たし（文語）　たい（口語）

●「たし」と良變と結合して「勝ちたからむ」などいふこともある。

指定の助動詞

六　指定の助動詞

〔我等は學生〕なり（文語）　だ（口語）
〔たり〕　〔である〕
〔です〕

●おもに體言の下につく助動詞である。

【注意】形容動詞の語尾と混同してはならぬ。（第九章三〇（注意）參照）

練習九八　次の一線の語の品詞を問ふ。

一　體素は飲むだけ血となり肉となる體力の原素なり。（動詞）（動詞）（指定助動詞）

二　全國の各藥店にあり。（動詞）

ほんとに靜かだ。（形容動詞）實に靜かな夜だ。（形容動詞）（指定助動詞）

三　現に近衛師團長たり。（指定助動詞）

四　砲聲殷々たり。（形容動詞）

時の助動詞

七　時の助動詞

文語	口語
つ	た
ぬ	
たり	
き	
けり	
り	
む	う

〔花（が）咲き〕
〔花（が）咲け〕
〔花（が）咲か〕
〔咲い〕

●現代文では「つ」「ぬ」「たり」「き」「けり」「り」は過去を示すに用ゐられ、（時として「たり」「り」が現在完了の意味を示すに用ゐられることもある）「む」は未來を示すに用ゐられる。

●古文では、英文法の Tense ほど正確ではないが、大體

現在（Present）　花　咲く

現在完了 (Present Perfect)　花咲きつぬたり　花咲けり　テ井ル　タ

過去 (Past)　花咲きけり　タ

過去完了 (Past Perfect)　花咲きてにたりけり　花咲けりきけり　テシマッタ　タ

但し、正確な過去完了でなくて、ただ一層過去の意味を強めるに用ゐられた場合が寧ろ多い。

いづくともなく逃げ失せにき

馬よりどうと落ちてけり

茫然として立ちたりけり

未來 (Future)　花咲かむ　ウ

「て」・「に」はそれぞれ「つ」・「ぬ」の連用形（第一三章活用表參照）

未來完了 (Future Perfect)　花咲きてなたらむ　花咲けらむ　タラウ　テシマハウ

のやうに用ゐられた。

從つて推量の助動詞と結びつくにも

推量（現在）　咲くらむ　ダラウ

現在完了の推量　咲きつぬたるらむ　咲けるらむ　タダラウ　テ井ルダラウ

過去の推量　咲きけむ　タダラウ

過去完了の推量　咲きてにたりけむ　咲けりけむ　テシマッタダラウ

【注意】「にき」・「てけり」・「たりけむ」等は便宜上一の助動詞として取扱つてよい。

八　比況の助動詞

月日は流るゝが　文語

光陰は矢のし　口語

やうだ　です

「て」・「な」はそれぞれ「つ」・「ぬ」の未然形（第一三章活用表參照）

比況の助動詞

時なり　代言

詠嘆なり　用言終止形

詠嘆の助動詞

九　詠嘆の助動詞

〔雁が音遠く聞ゆ〕なり
〔見渡せば花も紅葉もなかり〕けり

【注意】感動の意味を表す助動詞で、形は同じでも、指定・時の助動詞とは別である。古文に用ゐられた。

●「けり」は「げに持つべきものは子なりけり」のやうに、指定の「なり」の下につくことが多い。時の「けり」と區別するには全體の意味の上から考へるより外はない。

●口語では詠嘆の助動詞はなくなつてゐる。

可能の助動詞

一〇　可能の助動詞

〔打たば打た〕る（文語）〔打てば打た〕れる（口語）※
〔よく酷熱にも堪へ〕らる　られる
〔漁火點々數ふ〕べし

※（多くは上の動詞の語尾と結合した「打てる（たれ）」の形が用ゐられる）

ウケミ
レエキ
スイリヨ
ウケケレ
カヒボウ
レテイ
トキ
ヒキヨ
エタタ
カイウ
ケイゴ

敬語の助動詞

一一　敬語の助動詞

〔御手を揚げて打た〕す（文語）れる（口語）
〔慇懃に道を尋ね〕さす　られる

●受身及び使役の助動詞の轉じたものである。

●「せ|らる」のやうに、敬語の助動詞を重ねて用ゐることが多い。

行幸あらせらる

古文では「行かす」「尋ねさす」だけで、「御イデニナル」「オ尋ネナサル」の意味に用ゐた。

●又動詞の「給ふ」を敬語の助動詞として用ゐることもある。

行き給ふ
行かせ給ふ

●口語では動詞から來た「なさる」「あそばす」「くださる」等を敬語

の助動詞に用ゐる。又、自分が丁寧にいふ時は「ます」を用ゐる。

第一三章　文語助動詞の活用及び接續

【四一】　これらの助動詞は、動詞・形容詞と同じやうにそれぞれに活用する。今、次にまづ文語助動詞の活用表を掲げ、同時に他の品詞との接續を示さう。

（□印は現今用ゐられぬものを示し、○印は活用形の無いことを示す）

一　動詞型活用の助動詞

種類／活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身可能敬語	れ られ	れ られ	る らる	るる らるる	れ られ		四・奈變・良變の未然形に 右以外の動詞の未然形に
使役敬語	せ させ	せ させ	す さす	する さする	すれ さすれ	せ させ	四・奈變・良變の未然形に 右以外の動詞の未然形に

	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ	各動詞の未然形に
指定	なら たら	なり たり	なり たり	なる たる	なれ たれ	なれ たれ	體言及び用言の連體形に 體言のみに
時	て な たら けら ら	て に たり けり り	つ。 ぬ たり けり り	つる ぬる たる ける る	つれ ぬれ たれ けれ れ	て ね ○ ○	各動詞の連用形に但し（ね）の活用のみは奈變に連らず
推量	○	○	めり	める	めれ	○	各動詞の終止形に但し良變は連體形に
詠嘆	○ ○	○ ○	なり けり	なる ける	なれ けれ	○ ○	四・佐變・奈變の命令形に 各動詞の終止形に但し良變及び良變型助動詞には連體形に 各動詞の連用形及び助動詞「なり」に

二　形容詞型活用の助動詞

種類＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
推量	べ	くべ	くべし	くべき	くべけれ	○	各動詞の終止形に但し良變は連體形に
打消	まじく	まじくま	じまじき	まじけれ	○		
比況	ごとく	ごとくごとし	ごとき	○	○		用言の連體形に又は助詞「が」・「の」の下に
願望	たく	たくたし	たき	たけれ	○		各動詞の連用形に

【注意】「なり」「如し」の他形容詞に連る助動詞はない。

三　特殊の活用をなす助動詞

（これは特に注意してその語形變化を記憶せよ）

種類＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
打消	ず	ず	ず	ぬ	ね	○	各動詞の未然形に
	○	○	じ	じ	じ	○	
時	せ	○	き	し	しか	○	各動詞の未然形に但し加變・佐變は除外例
		○	む	む	め	○	各動詞の連用形に

推量						
ませ	○	○	○	○	○	各動詞の未然形に
まし	○	○	○	○	○	各動詞の終止形に但し良變は連體形に
	し	ら	ら	む	む	
まし	らし	らし	らめ	らむ	けむ	
ましか	らし	らし	らめ	らむ	けめ	
○	○	○	○	○	○	各動詞の連用形に

【注意】助動詞（特に動詞型のもの）と他の助動詞との接續は、大體動詞への接續に準ずるものと思へばよい。

●助動詞「き」の活用が加變に連る場合は未然（來）・連用（來）兩形に接する。但し「せ」・「き」には接續せぬ。

（「きき」「こき」などは誤）

●佐變に連る場合は「せ」・「き」は連用形（爲）に「し」・「しか」は未然形（爲）に接する。

（「せき」「しし」「ししか」などは誤）

●「ず」「べし」「たし」などが動詞「あり」と結合したものは形容動詞のやうに活用する。

ざらざりざりざるざれざれ

べからべかりべかり[べかる][べかれ]○

たからたかりたかりたかる○○

練習九九　次の文中の助動詞を指摘せよ。

一　言はぬは言ふにまさる。

二　金剛石も磨かずば玉の光は添はざらん

三　人を信せしめんと欲せば先づ自ら信ぜよ。

四　言はせておけばさまざまの雑言かな。

五　流石棄つるにも棄てられず。幼子をかき抱きて聲を限りに歎かせ給ふぞいたはしき。

六　時鳥なきつる方を眺むればただ有明の月ぞのこれる。

七　晩年は嫁に口授して八犬傳を稿せしめき。

練習一〇〇　次の二つの歌の意味をよく考へて、一線の助動詞が何種のものであるかを言へ。

一　秋來ぬと目にはさやかに見えねども
　　風の音にぞおどろかれぬる。

二　春來ぬと人はいへども鶯の
　　なかぬかぎりはあらじとぞ思ふ。

練習一〇一　次の文語助動詞の求められた活用形を示せ。

イ「す」の連用形　ロ「ず」の未然形・連體形

ハ「ぬ」の未然形・連體形　ニ「む」の連體形・已然形

ホ「き」の已然形

練習一〇二　次の一對の助動詞の意味の相違を説明して、且各、を含む文を示せ。

イ　まじ　―　まし

ロ　じ　―　ず

ハ　らむ　―　けむ

第一四章　誤り易き助動詞の接續

【四二】　助詞詞と他の用言との接續は前章の表に示した通りであるが、實際にあつては誤用せられる場合が(文語の場合は特に)多いから、その著しいものについて練習する必要がある。

【四三】　らる　さす

佐變に連るのは未然形からであるから、「罪せらる」「賣買せさす」といふべきであるが、現代文では「罪さる」「賣買さす」と「せ」を略して用ゐる習慣あるものは許されてゐる。

【四四】　しむ

同じく未然形から連るから「罪せしむ」「賣買せしむ」などは正しいが、「見せしむ」「來さしむ」などは誤で、「見しむ」「來しむ」でなければならぬ。但し「得しむ」だけは「得せしむ」と用ゐてもよい。

練習一〇三　次の文に誤あらば正せ。

一　宗高をして扇の的を射せしめき。

二　古來偉人と稱さる人は多くは民間より出でたり。

三　街路の兩側に樹木を植ゑさす。

四　街路の兩側に樹木を植ゑさしむ。

五　最優等者にのみ褒賞を得せしむ。

練習一〇四　次の動詞に受身及び使役の助動詞を附してはたらかせよ。

朽つ　居る　居る　改む　盡す

【四五】　り

四段・佐變・奈變に限る。下二段の連用形からつづけてはならぬ。

練習一〇五　次の文に誤あらば正せ。

一　聽衆に多大の感動を與へり。

二　見る影もなく荒れ果てり。

三　我が兵勝に乘じて復敵を沙河に破れり。

四　最後の五分間に於てあはれ佛軍は破れり。

五　既に中學の業を卒へるが故に進むで高等學校に入らむとす。

六　二度耳を傾けれど寂然として聲なかりき。

【四六】　き　けり　たり(時)

加變・佐變には特別の接續をなすことは前に述べた通りである。(第一三章附記參照)　最も注意すべきは、下二段及び佐變から「し」・「しか」に連る時、四段と混同せぬことである。

下二	寄	せ	し(しし誤)	せ	佐變	察	せ	し(しし誤)	せ	四段	致	し	し(せし許容)	し
		せしか(ししか誤)					せしか(ししか誤)					ししか(せしか許容)		き

つまり佐行動詞から「き」・「し」・「しか」に接續するに、「せき」は下二段に限り、「しし」・「ししか」は四段に限る。そして「せし」・「せしか」はどの動詞の場合にも用ゐてよいと思へば先づ間違ひ

はない。又佐行下二段の動詞から「けり」「たり」「つ」「ぬ」なども同様に連るに、四段・佐變と混同して「しけり」「したり」としてはならぬ。

練習一〇六　次の動詞に「き」「し」「しか」を接續させよ。

又「けり」「たり」を接續させよ。

馳す　重んず　返す　流す　載す　到着す

練習一〇七　次の文に誤あらば正せ。

一　本校を創立ししは明治二十年なりき。

二　懇に諭ししかばいたく後悔しき。

三　我等の渇望ししし平和の曙光は漸く見え初めぬ。

四　攻撃開始より陥落まで僅かに五ヶ月を費せしのみ。

五　彼に任したらば惡しくは計らふまじきをと仰しき。

●なほ「き」の代に「し」（連體形）を以て文を結ぶことも現代文では認められてゐる。

火災は二時間の長きに亙りて鎮火せざりし

【四七】　べし　べかり　らん　らし　めり　まじ

終止形（良變）のみは連體形から連るべきを、他の活用形殊に連體形に誤ることが多い。（口語で連體と終止の區別がないから文語の場合まで誤り易いのである。）

練習一〇八　左の文中の誤れる方の假名を消せ。

一　品物に手を觸るべからず。

二　明日必ず參上致さすべく候。

三　それにては成功とは言はるまじ。

四　故郷を雲や隔つるらん。

五　須らく學術の蘊奥を攻究せしむるべきなり。

練習一〇九　左の文に誤あらば訂正せよ。

一　滿員札を掲げたる場合乘車するべからず。

二　車内に餘地ある時は出入口に御立ち下されまじく候。

三　此處塵芥を捨てべからず。

四　國家の前途甚だ憂ふるべきものあり。

五　恐らく急には宥さるゝまじ。

六　異議なく先方にて引受けるべし。

七　此度は流石の彼も懲りたるらし。

【四八】　じ　ざり

連用形からなどつづけては誤である。

練習一一〇　誤あらば正せ。

一　適當の手段を講じざるべからず。

二　よも戯れには射らじ。

三　誘惑に捕へられざれ。

【四九】　なり（指定と咏嘆）　ごとし

指定の「なり」は連體形から、咏嘆の「なり」は終止形（良變は連體形）から連るから

聲する。（指定）なり　　聲す。（咏嘆）なり

の違ひがあるが、連體と終止とを兼ねた動詞では、場合によつて意味の上で區別する他はない。作文の場合は、指定の「なり」を終止形から接續させぬやうに注意するだけでよい。「ごとし」も連體形から連るから終止形に接續するのは誤である。（助詞「が」によつてつながれても變りはない。）

練習一一一　次の文の誤を正せ。

一　若し容易なりと考ふならば恐らくは過たん。

二　結局交渉は失敗に終るべしと思はるなり。

三　一言一句悉く溢る如き熱誠に滿ちたるものなりき。

四　次の學期には必ず首席を占むなるべし。

五　泣くが如く怨むが如く將た訴ふが如し。

練習一一二　左の文中に誤あらば指摘してその誤れる理由を述べよ。

一　本校の創立しられしは明治二十年なりし。

二　敵艦白旗を掲げり。

三　滿腔の感謝を捧ぐなるべし。

四　紙幣を贋造し或は贋造と知て通用す者は國法に處するべし。

五　木犀の香なつかしふ書齋に流れり。

六　絶えずかくの如き感を起さしむなり。

七　戰場に臨むで敵に背を見すが如きは武人の恥辱とする所ならざらんや。

八　殆ど應接に遑あらざらしめり。

九　人を遣して問はしかど滿足なる答を得ること能はざりき。

一〇　懦夫をして起たしむるべし。

第一五章　口語助動詞の活用及び接續

【五〇】　次に口語助動詞の活用表を掲げる。

一　動詞型活用の助動詞

（次表接續欄内に特に記さぬのは、文語の場合に準じて考へればよい。）

種類＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身 可能 敬語	れ られ	れ れ	る れ	る れ	れ れ	れ れ	
使役 敬語	せ させ	せ させ	せる させる	せる させる	せれ させれ	せ させ	

二　形容詞型活用の助動詞

種類＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
推量	らしく	らしく	らしい	らしい	○	○	各動詞の終止形に但し良變は連體形に
願望	たく	たく(う)	たい	たい	たけれ	○	○
打消	○	なく	ない	ない	なけれ	○	各動詞の未然形に

【注意】　形容詞の「な(無い)」と助動詞の「ない」とは別であることに注意せよ。

三　特殊の活用をなす助動詞

種類＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
打消	○	○	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	○	
時	○	て	た	た	○	○	
指定	○	で	だ	○	○	○	體言のみに又は助詞「の」の下に

●時の「て」「た」は撥音便のときは濁音になる。指定の「で」「だ」とは別である。

●指定の「だ」の代に「である」「です」なども用ゐられる。

●「ます」は丁寧にいふ時につける助動詞で從つて敬語の助動詞につくことが多い。

さうではありません

御出でなさいます

御覽下さいませ

その活用は

ませ　まし　ます　ます　ますれ　ませ

●「う」「よう」時「まい」(打消)「だらう」「でせう」(推量)は終止形だけで、他の活用形がない。

練習一一三　前掲の口語助動詞の活用表に準じて、次の動詞に接續し得る助動詞を附して、活用を練習せよ。

報いる　植ゑる　得る　死ぬ　有る

練習一一四　次の文中の助動詞を指摘せよ。

一　さあ日が上つた。そろ〳〵出かけよう。

二　安心しろ。明日はきつと勝つさ。いや勝たせるさ。

三　僕も男だ。卑怯な眞似なんかせぬぞ。

四　差支あるまいとは思ひますが念の爲もう一度御取調べなさつてはいかがです。

五　空瓶、折箱、丼などを窓から投げらるゝと線路工夫などが怪我をしますから腰掛の下にお置き下さい。

練習一一五　左の文中の「ない」の品詞を問ふ。

一　ない袖は振られない。

二　知らないといふ事は出來ない筈だ。

三　誰でも缺點のない人はない。

練習一一六　次の文に誤あらば正せ。

一　今夜ゆつくり考えて見やう。

二　早く聞きとふございます。

三　どつこい、さうは行くまゐ。

四　來年のことをゆうと鬼が笑うでしようか。

五　人の世の小さな誇、そこにどれだけの價値があろふ。宇宙の眞を援もうとする者には眞摯な謙讓がなければならなひ。

練習一一七　左の文に誤あらば理由を述べて訂正せよ。

一　そんなに急がさせないでもよい。

二　どうしても私達を引留めて歸らしません。

三　まさかそれ程の事はするまいと思ひます。

四　吾等四年級生徒は二つの旅館に分宿させた。

五　いや知らさなくとも苦情は言つて來まい。

六　今に首を斬らるだらうと見物は固唾をのんで觀てゐる。

七　念を押さしたんだけれどやつぱり駄目であつた。

第一六章　活用連語

【五一】　動詞だけではただ單純な現在の動作を示すに過ぎない。これにいろ〳〵な種類の助動詞が添うてそれぞれ複雜した意味を現すことが出來るのである。例へば

書く

とだけならば「書く」といふ現在の動作だけであるが、これに受身や使役の助動詞が添ふと、

書かる　書かれて

書か（す／しむ）　書か（すれ／しむれ）ど

のやうにそれぞれの意味を現すことが出來、又この二つを

重ねて

書か{せ/しめ}らる　書か{せ/しめ}らるれば

とすれば、使役の受身即ち他人から「どうさせられる」との意味を現すことが出來る。なほ同じ形で可能・敬語の意味を現す場合もあることは前に述べた通りである。

練習一一八　英文法の Active Voice と Passive Voice の作り方に國文法の場合を比較して考へよ。

練習一一九　動詞と助動詞との連結に於て國語と英語との差異の點を述べよ。

練習一二〇　助動詞「らる」を含んだ(イ)受身の文と(ロ)敬語體の文とを作れ。

【五二】　更に右の文を否定の形に作るには、打消の助動詞をその下につければよい。

書か{せ/しめ}られず　書か{せ/しめ}られ{ず(んば)/ざらば}

但し、二重の消打は肯定となる。

多からずとせず　多くないではない

約束は守らざるべからず　約束は守らねばならぬ

練習一二一　否定の文を作るに國文法と英文法との異なる點を述べよ。

練習一二二　二重打消(Double Negation)についての英文法は如何。

練習一二三　次の文の意味を問ふ。

一　一顧の價値なくんばあらず。

二　刻苦勉勵の賜にあらずんばあらず。

三　平常此の心掛あらざるべからず。

練習一二四　次の文に誤あらば訂正せよ。

一　大業を成さんと欲せば堅忍不拔の志無からざるべからず。

二　心誠に之を求めば成業の道豈無からざらん。

【五三】　又、時の助動詞が加はると、

書か（せ）しめられざらむ

書か（せ）しめられざりき

書か（せ）しめられざりけるが

練習一二五　右の三つの文例を口語に、なほせ。

【五四】　推量の助動詞が又その下に添ふと、

書か（せ）しめられざるべし

書か（せ）しめられざりしなるべし

書か（せ）しめられざりけむ

練習一二六　右の三つの文例を口語になほせ。

【五五】　必要によつては、その下に又同種もしくは異種の助動詞が連つて、いろ〳〵細かな意味をいひ表すことが出來る。

書か（せ）しめられざるべからず

書か（せ）しめられざるべからざりき

書か（せ）しめられざるべからざりしがごとし

書か（せ）しめられざるべからざりしならむ

練習一二七　右の四つの文例を口語になほせ。

練習一二八　次の文中の助動詞を指摘せよ。

一　父父たらざれども子は子たらざるべからず。

二　さぞ逢ひたかりしならん。

三　さぞ逢ひたかつたであらう。

四　右の時間内は踏切番人を附せざるにより注意せらるべし。

五　是非行かねばならぬことに定つてゐる。

六　豈鑑みざるべけんや。

【五六】　さて右のやうに、助動詞は動詞或は他の助動詞に結びつくが、その結びつき方の順序には自ら一定の規則があることは、今まで示した例でもわかる筈である。かうした種々の動助詞の連結を**活用連語**と名づけ、これによつて英文法のやうに Tense や Voice や Mood やを表すことが出來るのである。

●古文では英文法のやうに明確な假定法(Subjunctive Mood)があつた。

世の中に絶えて櫻のなかりせば
春の心はのどけからまし

鏡に色形あらましかばうつらざらまし

今日の口語でも、假定の場合は

もし世の中に櫻といふものがなかつたなら

と過去の形を用ゐてゐる。文語でも「なかりせば」といふ形だけは使用せられる。

復習五

練習一二九　次の文中の用言を拔出してその品詞を示し、且一つ〳〵を活用させよ。

鎌倉時代は極めて想像力の缺乏せし時代なり。この時代の小

說に見るに足るべきものなし。又この時代とても、作品の數は必ずしも尠からざりしならむも、今に傳はれるもの殆ど罕なり。蓋し、その文學としての價値に乏しかりしが爲に、その生命も短く、おのづから絶滅するに至れるものなるべし。

練習一三〇　左の文中の用言を指摘して、その活用形を言へ。

汽車の無い時であつた。山の男と海の男とが喧嘩をした。山の男が魚を鹽辛いものだといふ。海の男が魚に鹽氣があるものかといふ。喧嘩はいつまで經つても鎭まらなかつた。敎育と名づける汽車かかかつて、理解の階段を自由に上下する方便が閉けないと、お互の考はお互にわからない。

練習一三一　左の古文を口語になほせ。

一　あはれ今年の秋もいぬめり。

二　御氣色殊にうるはしう、手づから御酒酌ませて、庭前の花を飽かず眺めさす。

三　討たば討つべかりしを、いかが思ひけむ、宥してけり。

四　花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり。

五　父母の旅なる我を思ふらむ待つらむさまのおもかげに見ゆ。

六　主ある家には、すずろなる人心のまゝに入りくることなし。心に主あらましかば胸の中にそこばくの事は入り來らざらまし。

第一七章　詞助（一）

【五七】　助動詞と助動とは形が甚だよく似てゐる。そし

ていづれも單獨には用ゐられない。しかし助動詞には活用がある。助詞には無い。

【五八】　助詞は所謂「テニヲハ」で、日本語特有のものであるが、その役目はさまざまである。次に主な助詞を擧げて見よう。（口印は古文に用ゐられたものを示す。）

の　あの人　試驗の始まる日

が　君が代　雨が降る

は　花は櫻木

●をの下に連る時は「ば」となる。

わが罪をば赦せ

つ　天つ風

●右のつはのと同意味の助詞である。

を　文法を學ぶ　友の歸るを送る

と　行くとしよう　弟と遊ぶ　東京と大阪

【注意】「東京と大阪」「白と赤と黑」のやうに物を列擧する場合の「と」は、古文では必ずその一語一語の下に添へたが、現代文、特に口語では最終の「と」を省くことが多い。但し

二と三（と）の五倍

歴史と數學と文法（と）の臨時試驗

小林と森田（と）の弟（と）は同級だ。

のやうに最後の「と」が無ければ誤解を來す恐のある場合は省いてはならぬ。

や　手や足の運動

に　僕に見せろ　見物に行かう　松島に遊ぶ

八時に登校す

へ　前へ進め　北海道へ向けて出發したり

【注意】「へ」は方向を示す助詞で一定の時間なり場所なりを示す助詞の「に」とは少し意味が違ふ。(英語の "for" と "to" 又は "at" との差のやうなものである。)で、

前に進め　京都へ着く

などは誤である。しかし口語ではっきりした區別はない。

より(から)　明日より休暇(明日から休暇)　米國より歸朝せり(米國から歸朝した)　父より叱らる(父から叱られる)

より　雪より(も)白し(雪より(も)白い)

【注意】これは比較する時の「より」で前のとは違ふ。

まで　來週まで授業がある　長崎まで出張す

て　斃れて後已む

で　友は來らで

●「で」は助動詞「ず」と助詞「て」との複合した「ずて」の變化したもの。

【注意】「飛んで」「漕いで」等音便の爲に「て」が「で」になつたのと混同してはならぬ。

にて(で)　竹にて(で)造る　靴にて(で)蹴る

【注意】右の口語の「で」は又前の二種の「で」とも異なる。

して　松青くして砂白し

ば　苦あれば樂あり　急がばまはれ

ど　目的は善けれど手段惡し

ども　天氣晴朗なれども浪高し

とも　勝るとも劣るまい

も　我も人なり　三人もあれば澤山だ

つつ（ながら）　眺めつゝ行かん　散歩しながら話さう

ぞ　知る人ぞ知る

こそ　我こそ先陣せめ　君こそやつて來給へ

なむ　これなむ都鳥

●「ぞ」「こそ」「なむ」は上の體言の意味を特に強める時に用ゐられる。

し　無きにしもあらず　時しもあれ

【注意】「し」も強めるに用ゐる。時の助動詞「し」と混同してはならぬ。

生きとし生けるもの

ありし昔に似ず

かし　昔の人はかく風流なりしぞかし　見よかし

●「かし」も強める助詞である。

のみ（だけ）　僅に三人のみ　そのことだけは確だ

ばかり　氣も狂はんばかり　約二週間ばかり

ぐらゐ　それぐらゐな我慢が出來ぬか　五六寸ぐらゐの長さ

ほど　考へれば考へるほどわからなくなる　山ほどの御土產

●口語では「のみ」の代に「ばかり」「だけ」が普通に用ゐられ、「ぐらゐ」、「ほど」も主に口語に用ゐられる。

だに　犬にだに如かざるべけんや

すら　犬すら恩を知る　況や人間をや

さへ　雷さへ鳴りはためきて恐し

●「だに」「すら」は比較して輕い方を擧げる時に、「さへ」はあるが上に物の加はる意をあらはす時に用ゐる助詞である。次のやうな文は誤と知るべきである。

雨降り風だにすら吹く

一點の曇りさへなし

但し文語の「だに」「すら」の代りに口語では大抵「さへ」が用ゐられる。又文語の「さへ」の代りには「まで」が用ゐられることがある。

猫まで泣いてゐる。

【五九】　右に示した助詞は、一つ〳〵の意味や役目は同一でないが、或は體言或は用言に添うて、上下の關係を明らかにしたり、又は語句の接續の用をなしたりしてゐることがわかるであらう。

練習一三二　左の文中の助詞を指摘せよ。

一　針ほどの事を棒ぐらゐに云ふ。

二　そこで私どもだけで相談を致しました。

三　盗人の暇はあれども守り手の暇はなし。

四　げに聞くだに涙の種ぞかし。

五　枯枝に烏のとまりけり秋の暮。

六　君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで。

練習一三三　左の文中の―線の語は助詞か助動詞か。

一　教へて下さい。

二　古事記はいつ頃出來た本で何が書いてあるか說明しよう。

三　馬よりどうと落ちてけり。

四　花をし見れば物思ひもなし。

五　故郷戀しやと思ひし日もありき。

六　わが衣手は露に濡れつゝ。

七　雲居にまがふ沖つ白波。

八　我さへも一斗の餅は搗かぬのに棚で鼠はごとつきにけり。

練習一三四　左の文に誤あらばその理由を述べて訂正せよ。

一　無線電信お發明したのわ誰か。

二　馬へ乘りて行くべし。

三　思い出すさえ恐しひ。

四　立錐の餘地さえなかりき。

五　そよとの風だに吹かず。

六　雪だに生憎に降り出でて寒氣いよ〳〵加はりぬ。

第一八章　助詞（二）

【六〇】　なほ助詞には疑問の意味を表すものがある。

か　霞か雲かはた雪か　これは何ですか

や　志望の者ありや否や

●古文では「いつ」「如何」「幾何」「誰」などの疑問の語が上にあるときは必ずかを用ゐた。即ち

幾何なかる（なりやは誤。但し現代文では併用される。）

ぞ　此の手の大將軍は誰ぞ

【六一】　形は同じでも反語助動詞として用ゐらるゝ場合もある。

か　いかでか知るべき

や　豈他あらんや　思ひきや

かは　誰かは勇まざらん

やは　一戰もせで退くことやはある

【六二】　呼びかけ、命令の助詞がある。

よ　雪よ降れ〳〵　あれを見よ

や　坊や、こゝへおいで

ろ　起きろ

な　くれておやりな

【六三】　禁止の助詞がある。

な　怠るな

な…そ　な怠りそ

【注意】　右の「そ」を濁つてはならぬ。「人にな語りぞ」は誤である。

【六四】　願望の助詞がある。但し古文に用ゐられた。

ばや　我も行かばや　私モ行カウト思フ

なむ　汝彼も行かなむ　汝彼モ行ツテホシイケバヨイ

●「ばや」は自分の希望を述べる場合の助詞。

「なむ」は相手の人なり物なりに對して希望する場合の助詞。

【注意】　右の「なむ」は強める場合の助詞「なむ」とは別である。又助動詞の「なむ」とも混同してはならぬ。

がな　見てしがな　何をがな

●なほ古文には他に「が」「がもな」がある。

そこともいはぬ旅寢してしが

世の中は常にもがもな

【六五】　感動の助詞がある。

や　あな嬉しや　壯なる哉言や

よ　建武の昔かとよ　花の美しさよ

か　あゝ、天なるか命なるか

かな　悲しい哉

●「か」は現代文には餘り用ゐられぬ。又古文には「かも」「も」がある。

三笠の山に出でし月かも

雲路まどひて行方知らずも

を　昨日今日とは思はざりしを

ね　つまらないね

さ　さうさ

【六六】　右のやうに、形は同じであるが違つた役目をもつてゐる助詞がいろ〳〵あるから注意すべきである。又數語助詞を重ねて用ゐることも多い。前に出したものもあるが、なほ次の例を見よ。

これには深い仔細がある

此の度こそは信玄が坊主首を獲め

その夜宿りを求めし僧は我なるぞや

況や人間に於てをや

誰にか問はん

智にして且仁なりといふべし

講和使節として出發した

朝廷正成をして賊を防がしむ

●「にして」「として」「をして」はそれぞれ複合した一の助詞と見做してよい。

練習一三五　次の一線の助詞は何の意味を表す助詞か。

一　雲か山か呉か越か。

二　誰か識らん萬里遠征の情。

三　よき獲物がなあれかし。

四　浮雲の富我に於て何かあらん。

五　みんな來い。軍ごつこをしようぢやないか。

六　やせ蛙負けるな一茶これにあり。

七　我と來て遊べや親のない雀。

八　家の寶となさばやと存じ候。

第一九章　助詞の接續（一）

【六七】　さて、これらの助詞は今まで示した例でもわかるやうに、體言にも用言にも連る。體言との連結は誤る恐れがないから特に説明すまい。

●ただつくべき體言が略せられてゐるために直接用言（無論連體形）に續くことがある。

梅は白きがめでたし

よいといふまで默つて居れ

知るも知らぬも逢坂の關

用言と助詞との接續で、誤りやすいのを擧げる。

【六八】　と

一時休戰狀態にありといふ

答案は簡明なるをよしとす

目下調査中なりと聞く

のやうに用言の終止形をうけるのが正しいが、現代文では

月出づると見えて

嘲弄せらるゝと思ひて

終日業務を取扱はしむるといふ

萬人皆其の德を稱へけるこそ

と連體形を承ける習慣あるものは許されてゐる。

●「といふ」がつまつて「てふ」となることもある。體言の時も同じである。

西方淨土にありてふ無熱池もかくやとばかり

夢てふもののはかなさよ

●又「といふ」の代に「なる」が用ゐられる習慣のあるものは許されてゐる。

所謂哺乳獸なるもの

顏回なる者あり

【六九】ば

未然形からと已然形からと連ることは前にも屢述べた。文語の場合は特に紛れぬやうにせねばならぬ。次の例についてなほよく會得するがよい。

花散らば　花ガ散ツタラ（ルナラ）

花散れば　花ガ散レバ（ルト）

花散りなば　花ガ散ツテシマツタラ

花散りぬれば　花ガ散ツ（タ）テ（カノデ）シマフト

花散りたりせば　花ガ散ツテシマツタトスレバ

花散りたりしかば　花ガ散ツテシマツタ（カノデ）ラ

花美しくば　花ガ美シ（カツタラ）
花美しければ　花ガ美シイ（イナラ）（ノデ）

即ち已然形を受けるときは已然の意味と、又場合によつては假定（條件）の意味と兩方に用ゐられるのである。

練習一三六　文語の「寒くば」「寒ければ」の差異を問ふ。

練習一三七　文語の「無くば」「無ければ」「無かりせば」の區別を説明せよ。

練習一三八　文語の「知らば」「知れば」「知れらば」「知りたらば」「知りたりせば」の意味を説明せよ。

練習一三九　左の文の○の部分に適當の假名を埋めよ。

一　明日天氣な○ば遠足せん。

二　若し知れる者あ○ば申出でよ。

三　折角靜養中に候○ば程なく全快仕るべく候。

四　當日雨天に候○ば順延の事と御承知有之度候。

五　萬一不都合の行爲有之候○ば御通告相成度候。

練習一四〇　左の文中誤あらばその理由を述べて訂正せよ。

一　若し不都合の點あれば指摘さるべし。

二　今夕御都合宜しければ御訪問申し上ぐべく候。

三　見事かの頭上の林檎を射落せば汝が命を助けん。

四　かれ老ひたりとも戰場にのぞめば必ず壯者を凌がむ。

五　例を擧げば限りなくある。

【七〇】　とも　ど（ども）

「とも」と「ど」(又は「ども」)は、いづれも前後の意味が反對な時に用ゐられる助詞である。「とも」の方は、假定をあらはし、そしてその接續は

雨降るとも　我は行かん

負けたりとも相手を恨むべからず

幼くとも　汝も武士の子ぞ

腹をたてたくとも　我慢せよ

のやうに、動詞及び動詞型活用の助動詞は終止形、形容詞及び形容詞型活用の助動詞は未然形からである。

●口語では雨がふつてものやうに「でも」が用ゐられるのが普通で　これは連用形から連る。

「ど」(「ども」)の方は、確定をあらはし、そしてその接續は

待てど(とも)　友來らず

雨止みたれど(ども)　空はなほ曇れり

體は小さけれど(ども)　力強し

登山したけれど(ども)　案内を知らず

のやうに、用言の已然形からである。

●口言では「けれども」が用ゐられる。

雨はやんだけれども

かやうに、未然形を承ける「ば」と、この「とも」とは假定の條件を表すから、下の文の結も假定の語を用ゐ、已然形に承ける「ば」と「ど(ども)」は確定の條件を表すから、下の結の文も確定の語を用ゐるのが普通である。

晴天ならば
雨(ガ)降るとも(降ッテモ)　我(僕)は行かん(ウ)
雨天なれば(ダカラ)
雨(ハ)降らざれども(ヌケレドモ)　我(僕)は行かず(ヌ)

【七一】　右のやうに「とも」と「ど(ども)」とは多少意味が違ふけれど、

給金は低くとも(けれども)應募者は多かるべし

のやうに、はつきり用ゐわけねば誤解を生ずる恐ある外、現代文では「とも」「と(ども)」のいづれの場合でも「も」を代用することが多い。「も」は用言の連體形を受ける。

雨降るも(降るとも)　我は行かん
晴天なるも(なれども)　風寒し

何等の事由あるも(ありとも)　議場に入る事を許さず
經過は頗る良好なりしも(なりしかども)　昨日より聊か疲勞の狀あり

第二〇章　助詞の接續　(二)

【七二】　か　や

有るか　無きか
有りや　無しや

の例でもわかるやうに、「か」は連體形を、「や」は終止形を承ける助詞である。しかし現代文では

有るや
面白きや

父に似たるや母に似たるや

のやうに連體形から疑問の「や」に連ることも許されてゐる。

【七三】　な

禁止の助詞「な」は、動詞及び助動詞の終止形（良變及び良變に似た活用の助動詞は連體形）から連る。だから

功を急ぎて過するな

親の恩を忘るるな

は誤である。

●同じ意味でも、助詞を用ゐずに「勿れ」を用ゐれば、

（正）　親の恩を忘るる勿れ

（誤）　親の恩を忘る勿れ

●又「な……そ」はその中間に用言の連體形（佐變加變は未然形）を挿入するのである。

練習一四一　左の文中の誤を正せ。

一　敵衆しとも恐るな。

二　今は悔ゆるとも及ばじ。

三　矢盡き刀折れるとも敵に降るまじ。

四　萬一失敗すれども決して落膽するべからず。

五　思は遠く故郷に馳せども翼なきを如何せん。

六　主人なしとて春な忘れぞ。

練習一四二　次の文の正否を記し、誤つてゐるのはその理由を述べて訂正せよ。

一　萬事に油斷するな。

二　萬事に油斷する勿れ。

三　萬事に油斷なしそ。

練習一四三　疑問の「や」「か」及び禁止の「な」を適當に次の語の下に附せよ（助動詞「勿れ」をも各に附してみよ。）

爲す　爲　死す　死ぬ　留む　違ふ

●願望の助詞「ばや」「なむ」は共に未然形から連る。特に「なむ」は相手の人物に對しての希望であることを忘れてはならぬ。即ち

花散らなむ

は「花が散レバヨイ。散ッテホシイ」の意である。之を

花散りなむ（花ガ散ッテシマフダラウ）

の「なむ」（現在完了の助動詞「ぬ」の未然形に未來の助動詞「む」の結びついたもの）と紛らはされぬやうにせねばならぬ。これは動詞の連用形から連る點でも區別ができる。未然と連用とを兼ねた活用の動詞にあつては前後の文の關係から區別する他はない。

【注意】已然形から連る「ばや」「ばにや」等の「や」は疑問の助詞で、願望の助詞の「ばや」と混同してはならぬ。

出世の望あればやまめ〳〵しく立働く

多忙なればにや久しく文通だにせず

練習一四四　左の古文を解釋し、且一線の語の品詞を言へ。

一　我が涙雨と降らなむ。

二　歸りなんいざ。

三　早ふるさとへ歸らなむ。

四　この由告げ參らせばやとて泣く〳〵なむ歸り來にける。

五　櫻花散らば散らなむ散らずとてふる里人の來ても見なくに。

六　波風の靜かなる日も舟人は樅に心を許さざらなむ。

【七四】　用言に接する其の他の助詞「が」「の」「に」「を」「そ」「かな」「のみ」「ばかり」等はすべて連體形を受ける。だから

天も崩るばかりの響

折々梟の聲淋しげに聞ゆのみ

恰も機械水雷の爆發すにも似たり

などは誤である。

練習一四五　左の文中に誤あらば正せ。

一　かくて徒に年老ゆばかりなり。

二　恨に報ふに德を以てす。

三　殆ど空中を飛翔すの思あり。

四　世人に譏らるが心憂しのみ。

五　益〻寒冷の氣を加ふのみ。

六　仕合に負くの記。

七　暮るを待たで旅亭に宿る。

八　聞くだにも苦々しぞかし。

九　昨今漸く實用に供せられんとすに到れり。

一〇　學問は重荷を負ふて坂を攀づが如し。

復　習　六

練習一四六　左の文中の誤を理由を述べて訂正せよ。

一　讀書は知識を廣むの第一法。

二　板垣死するとも自由は死せず。

三　健康未だ劇務に從事せしむを許さず。

四　懇に戒めども馬耳東風と聞き流すのみ。

五　たとへ殺戮さるまでも誓つて敵に降服するな。

六　我が國人が忍耐力に乏しきといはるは實に慨はしき極ならずや。

練習一四七　次の文中の動詞を指摘して、その種類と活用形とを言へ。

一　教ふるは學ぶの半ばと知れ。

二　聞けば聞くほどお氣の毒です。

三　優るとも決して劣るべくもあらず。

四　「醫者の來るまで」は重寶な本だ。

五　さながら盆の水を覆すにも似たり。

六　時鳥名をも雲居に揚ぐる哉弓張月の射るにまかせて。

練習一四八　左の和歌を口語になほせ。

一　山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも。

二　あたら夜の月と花とを同じくは心しれらむ人に見せばや。

三　人はただ誠の道を守らなむたかきいやしきしなはありとも。

四　世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな。

五　明けばまた秋の半ばも過ぎぬべし傾く月の惜しきのみかは。

第二一章　副詞

【七五】　副詞は用言の意味を限定する任務を持つ品詞であることは既に述べた。（第二一章(四)六參照）　つまり形容詞は體言の意味を限定し（なほ形容詞は動詞と同じく述部をなす場合もあることは既に述べた通りである。）

副詞は用言(及び活用連語)の意味を限定するのである。

一　美しい(形容詞)花(體言)が咲いた

二　イ　花が非常に(副詞)美しい(用言(形容詞))

　　ロ　花が綺麗に(副詞)咲いてゐる(活用連語)

の例でもわかる。(一)の美しいは、どんな花かと花といふ體言の意味を詳しく説明したのであり、(二)の(イ)で非常には、どんなに美しいかを、又(ロ)の綺麗には、どんなに咲いてゐるかといふ咲き方を説明したので即ち用言(或は活用連語)の意味を限定してゐるのである。同じ語が別々の品詞に用ゐられた

そは甚だしき誤なり　兩者甚だしく相違せり

といふ二文を比べてみても形容詞と副詞との役目は了解されるであらう。

(右の「甚だしく」は形容詞の連用形が轉じて副詞となつたものであることは已に我等の學んだところである。)(第三章(六)轉成の副詞參照)

【七六】　なほ形容詞には活用があるが、副詞には活用のないのも、兩者の差異の一つである。

●英文法の形容詞と副詞との異同を之に比べて考へて見よ。

【七七】　副詞は又他の副詞の意味を限定する役目をも持つてゐる。此の點も形容詞と異なるのである。形容詞は幾ら重なつても、やはり皆下の體言を形容する。副詞が重なる時は、二つ共下の用言の意味を限定するか、上の副詞が下の副詞の意味を限定するかである。

大きい白い犬　大きくて白い犬

強く烈しく打鳴らした　非常に烈しく打鳴らした

【七八】　なほ、副詞は必ずしも常に限定する語のすぐ上にあるとは限らぬ。他の數語を隔てて限定する場合も多い。

度々催促の使が來た

漸く目的地に到着したり

【七九】　さてこれらの副詞には本來のものの外、他の品詞からそのまゝ或は複合語となつて轉成したものが多い。漢語から來るもの、動物の聲、物の音などから來るものも澤山ある。次の練習題を試みれば自ら覺るであらう。

練習一四九　左の文中の副詞を拔出し、且どの語を限定してゐるかを説明せよ。

一イ　澤山召上れ。

ロ　海上頗る平穩なりき。

ハ　更に一段の努力を要す。

ニ　忽ちパッと光がさしました。

二イ　その効果は極めて著しい。

ロ　財囊の底を見て節約するも既に遲し。

ハ　風は益〻烈しく、波は愈高し。

ニ　年はまだ若いけれどもなか〳〵はしこい。

三イ　少し右へ寄れ。

ロ　もつと丁寧に取扱ふがよい。

ハ　いと嚴に仰せし御言葉今もなほ忘れられず。

ニ　要するに議論の餘地なし。

四イ　猿共が物珍しさうにキャッキャと騷いでゐる。

ロ　遂に確實に我が軍に占領せられたり。

ハ　最もよくきく胃の藥は弊店製の「意外」也。敢へて之を江湖諸賢に薦む。

ニ　世の中は太く短く暮らせ。

ホ　茲に謹んで祝賀の意を表す。

ヘ　それは恐らく事實ではあるまい。

ト　冀はくは御愛讀の榮を賜はらんことを。

チ　突如として意外なる方面より甚だ驚くべき報告至れり。

リ　さわ〳〵と我が釣りあげし小鱸の白きあぎとに秋の風吹く。

練習一五〇　次の副詞の中から十種を選んで、その一つづつを含んだ短い文を作れ。

專ら　遙に　全く　悠々と　決して

從容として　豈　蓋し　畢竟

ひら〳〵と　毎日々々　須らく　俄然

散々に　カチ〳〵と　フハリ〳〵

練習一五一　左の文中の一線の語の品詞は何か。

一　物凄く恐しき夜なり

二　恐しく寒い晩だ。

三　有難く忝き仰かな。

四　決然として奮起する者十數名。

五　彈丸雨飛すれども將軍自若たり。

六　泰然自若毫も恐るゝ色なし。

七　見るなと言はれるほどなほ見たいが人情。

八　なほ明日詳しく申上げます。

九　それ或は然らん。

一〇　折角の計畫が凸坊の惡戯で滅茶々々に壞れてしまつた。

練習一五二　左の一線の語は何か。

一　左の條々かたく御斷り申し候。

二　城かたくして拔けず。

三　防備をかたくして敢へて出でず。

【八〇】　以上で、我々は國語の九品詞に就いて大體學び得た。どんな文でも、この九品詞に分解が出來ねばならぬ。

次　例題をみよ。

(一)谷間の黑みからだん〳〵こちらへ迫つて來る

名　助　名　助　副　代　助　動（其四、連用）　助　動（加變、連體）

黃昏の色を忙しい機の音が招き寄せる

名　助　名　助　形（しく活、連體）　名　助　名　助　動（加四、連用）　動（佐下二、終止）

(二)あゝ彼は眞に尊く且偉大なる殉教者なりき。

感　代　助　副　形（く活、連用）　接　形動（なり活、連體）　名　助動（指定、連用）　助動（キ（過去）終止）

文

第二二章　文の成分　(一)主語　述語

主語

【八一】　我等は文は必ず主部と述部とから成立つことを知つてゐる。又その主部と述部とを組立てる材料である單語の、各品詞としての性質も大體學び得た。

さて**文**(英文法のSentence)の主部を成す數語の中で、その主題となる語は體言であつて、之を**主語**(英文法のSubject)と名づけ、又述部を成す數語の中で、その中心となつて、主題の動作・狀態等を表す語は、用言(但し助動詞のみで述語となり得るのはなりたり(だ)如しの三種である。)若くは活用連語で之を**述語**(英文法のPredicate)と名づける。主語と述語とは文の中の缺くべからざる要素である。例へば、

主部　述部
この繪は　ほんとに美しい

主　述
可愛らしい白い小犬が　樂しさうに庭の芝生の上を

述部語
驅け廻つてゐる

主部語　述部語
その音　遠雷の如し

【注意】主語には右のやうに「は」又は「が」といふ助詞が添ふことが多い。時としては、他の助詞を伴ふこともある。

おれも男だ

君こそたまにはやつて來給へ

雨さへ俄に降り出でたり

【八二】今假に、主語をS、述語をPであらはすとすれば、

S　＋　P

といふのは文の最も簡單な形である。即ち

花S　＋　咲くP

雨　降る

人　來

のやうなのがその例である。

練習一五三　次の文中の主語と述語とを指摘し、且その語の品詞を言へ。

一　敵艦見ゆ。

二　これは旨い。

三　櫻花爛漫たり。

四　我等は日本男兒なり。

五　實行はなか〳〵むづかしい。

六　恐らくは汝も知らざるべし。

七　いつしか窓の向うの石垣山の梢に近く夕日が次第に沈みかかつてゐた。

●SかPかが略せられてゐる文、特にSの省かれる場合が國語では甚だ多い。

（僕は）今歸つて來たんです

孝は百行の本（なり）

命令の意味の文でSが省かれるのが常であることは、英文法と同じである。

(汝)來れ

●排列は必ずS＋Pの形であるが、時として特に述語の意味を強める爲に、順序を顚倒することがある。

偉いね秀吉は

【八三】 Sは體言、Pは用言若しくは活用連語であるのが普通であるが、時としては用言又は活用連語がSに、助詞がPになることがある。（但し、これはその主部或は述部の體言なり用言なりが略せられてゐる場合か、それと同じやうに取扱はれてよい語が用ゐられた場合に限る。）

言ふは[S]易く　行ふは[S]難し

知らぬが[S]佛だ

汝は幾歳か[P]

彼何者そ[P]

練習一五四　左の文中の主語と述語とを指摘せよ。

一　それもよからう。

二　人や聞かむ。

三　今夕出發します。

四　彼方に聳ゆるが富士山か。

五　誰ぞ汝は。

六　負けるは勝。

七　及ばざるは過ぎたるにまされり。

【八四】

第二三章　文の成分　(二)補語附文主

主部　生徒が　述部　本を讀む
主部　その顏　述部　猿に似たり
主部　山の芋　述部　鰻となる

などのやうな文では

生徒が　讀む
その顏　似たり
山の芋　なる

だけではまとまつた思想を言ひ表せない。「本を」「猿に」「鰻と」があつて始めて完全な文を成すのである。このやうに、或種のPにあつては、それだけではSの動作や狀態を十分に現すことが出來ぬものがある。その場合は「を」「に」「と」等

の助詞を伴ふ體言を要する。Pの叙述を補ふものであるから、之を**補語**と名づける。

【注意】右の文例中の「本を」「猿に」は英文法の客語(Object)に「鰻と」は補語(Complement)に當るが國文法では、述語の意義を補うてその叙述を完全ならしめる語を、總稱して補語と呼ぶ。

【八五】

母親が　子供に　菓子を　與へる
教　師　生徒に　文法を　教ふ

のやうに、二つの補語を要するPもある。その場合に、人には「に」、物には「を」助詞を伴ふのが常である。

【注意】英文法では共にObjectで、且Indirect Object, Direct Objectと名づけてゐる。

【八六】

伊勢物語は一名を在五中將日記と呼ばる

朝廷正成をして賊を防がしむ

父の恩は山より高し

妹姉に死なる

丁稚が番頭から頭をなぐられた

の□中の語のやうなのも補語である。

【八七】

我等は日本男兒なり

佐久間大尉艇長たり

その聲雷の如し

汝は幾歳か

彼何者ぞ

のやうに、助動詞若しくは助詞がPとなる場合、その上に來る體言は補語と見做してよい。

●補語は體言なのが普通であるが時としては、それに相當する他の品詞であることもある。

氣候が暖くなつた

辯舌流るゝが如し

及ばざるは過ぎたるにまされり

●補語も省略せられることもあり意味が強められる爲に位置を換へることもある。

明日また(君に)會はう

それを僕は望んでゐたのだ

【八八】　今、補語をCであらはすとすれば、補語を含んだ文の普通の形式は

S＋C＋P

となる。即ち、文は、簡單なものでは、その形は

S＋P

か

S＋C＋P

かのいづれかの他にはない。

練習一五五　左の文中の補語を指摘してその語の品詞を言へ。

一　己れを知れ。

二　足るを知れ。

三　夢になれ。

四　君を大將と仰ぐべし。

五　秀頼は木村長門守重成を使節に任命した。

六　今日は先生から大變賞められた。

七　先づ余をして語らしめよ。

八　我こそは今井四郎兼平よ。

九　いつしか四邊はくらうなりぬ。

一〇　顏色さながら生けるが如し。

練習一五六　左の文中の主語・述語・補語を指摘せよ。

一　おゝ月が出た。

二　柔よく剛を制す。

三　わるいのはおればかりだ。

四　加藤清正先鋒たり。

五　落花紛々たり。

六　拍手急霰に似たり。

七　十三に五を加へよ。

八　アメリカはコロンブスに發見せられた。

九　言はぬは言ふにまさる。

一〇　過ぎたるは及ばざるが如し。

【八九】　この

S＋P　或は　S＋C＋P

といふ並び方が、文の成分の排列（Word-order）の上に於ける國語の特色である。今、英語及び漢文（支那語）のそれと比較すれば、（英語及び支那語のつはObjectを示す。三國語とも同種の最も簡單な形に於て比較する。）

國　S＋P　　英　S＋P　　漢　S＋P

S＋C＋P　　S＋P＋{O, C}　　S＋P＋{O, C}

の如く、C乃至OとPとの位置に於て、國語は他の二者と相違がある。又、問の場合は、

國　S＋P？　　英　P＋S？　　漢　S＋P？

S＋C＋P？　　S＋P＋{O, C}？　　P＋S＋{O, C}？

で國漢兩者は、通常の形と同じであるが、英語ではPが一番先へ來るのが一般である。このやうに、各國の語によつて、文の成分の排列が異なるのである。いづれにしても、國語では、述語が必ず最後に（補語より下に）來ることが著しい特

色である。（特に意味を強める爲に順序を顚倒する場合の外は。）

【九〇】　國語の文の中には、時として

日本人は毛髮黑し

のやうなのがある。この文では、Pは「黑し」であることは言ふまでもないが、そのSは「日本人」ではなくて「毛髮」である。そして、この「毛髮黑し」といふ一つの文がまた「日本人」をSとしてそのPをなしてゐるやうな形をとつてゐる。これ亦國語の文に特有なもので、この「日本人」のやうなのを**文主**と名づける。

文主

【注意】但し、

日本人の毛髮は黑し

といふ文には、文主はない。

練習一五七　次の文中の文主と主語とを指摘せよ。

一　支那は人口多し。

二　あの人は馬鹿に足が速い。

三　僕はなんだか頭が痛くなつた。

【九一】

余未だ柔道を習はず

といふべきを、

柔道は余未だ之を習はず

といふ形にすることがあるが、この「柔道」は、「之」と同じものであるからCであつて、文主と混同してはならぬ。「之を」が略せられて、「柔道は」だけ殘つてゐる場合は、一層文主と紛れ易

いから注意する必要がある。

練習一五八　左の文中―線の語は文主か補語か。

一　兎は前足が短い。

二　門は私が閉めました。

三　怒は敵と思へ。

四　露西亞は國土廣し。

五　帝國議會は毎年之を召集す。

第二四章　文の成分　(三)　修飾語

【九二】 S・P・C・文主等は、文の主要成分で、これが無ければまとまつた思想は表せない。文の成分には、この他にこれらの主要成分の意味を修飾限定する語がある。無くても

修飾語

形容詞的修飾語

濟むけれど、あれば十分にその思想を表し得るのである。

例へば、

この油繪はほんとに美しい

(S　P)

の「この」・「ほんとに」がそれで、之を**修飾語**(英文法のModifier)と名づける。修飾語には左の二種がある。

其の一　形容詞的修飾語(英文法のAdjective Modifier)

【九三】 文中の體言を修飾する語で、形容詞並びに動詞(及び活用連語)の連體形、若しくは「の」・「が」等の助詞、或は「に於ける」を伴ふ語などがそれである。

美しい花が咲いた

散る花を追ふ勿れ

それは及ばぬ望だ

この世をばわが世とぞ思ふ

學界に於ける功勞者

練習一五九　次の文中の形容詞的修飾語を指摘し、且いづれの語を修飾してゐるかを述べよ。

一　まあ、可愛い雛ですね。

二　靜かなること林の如し。

三　渦卷く波にざんぶと跳び込んだ。

四　これらの人々が講和會議に於ける花形であつた。

五　我等が父は河津殿と申して聞えたる弓取なりしとかや。

副詞的修飾語

其の一　副語的修飾語（英文法の Adverbial Modifier）

【九四】　文中の用言（及び活用連語）若しくは副詞を修飾する語で、すべての副詞の他「に」「へ」「にて」「で」「より」「から」「まで」等の助詞、或は「に於て」「を以て」等を伴ふ語などがそれである。

この繪はほんとに美しい

校長はいと恭しく勅語を捧讀したり

彼方に聳ゆるが富士山か

此處へお出で

記念講演會は青年會館にて開催す

鉛筆で書いてもよろしい

午後一時より體格檢査を行ふ

東京から大阪まで長距離飛行を試みた

これは將來に於て問題となるだらう

日本は風光を以て外人に知らる

【注意】時として副詞的修飾語が助詞「は」を伴ふ場合がある。之を

主語や文主と混同してはならぬ

一回は我勝ちぬ

昨日は大失敗を演じたよ

【注意】又助詞の伴はない場合もある。

今朝神戸へ向けて出發した

寂然聲なし

大正八年五月七日立太子式を行はせらる

練習一六〇　次の文中の副詞的修飾語を指摘し、且いづれの語を修飾してゐるかを述べよ。

一　昔男ありけり。

二　北から冷やりと風が來た。

三　轟然艦は爆沈したり。

四　明五日青山練兵場に於て大觀兵式擧行せらるべし。

五　先日は失禮しました。

六　姫百合は風情を以て勝れたり。

七　梅花は既に六七分。麥は未だ二三寸。

【九五】　修飾語は幾つも重ねて用ゐられたり、他の語を飛び越えて修飾したりすることは形容詞副詞の場合と同じであるが、なほ主要成分を修飾するのみならず、亦修飾語中の體言若しくは用言をも修飾することがある。

この近江八景の繪は綺麗だね

これはほんとに綺麗な繪だ

辯士は大層落ちついた態度で靜かに口を開いた

いづれにしても、修飾語は常に修飾せられる語の上に來る。これがまた國語の特色である。

●英語では副詞的修飾語は用言の後に來ることがある。

富める人　a rich man

彼は早く走る　He runs fast.

●形容詞的修飾語をaMで副詞的修飾語をdMであらはすとすれば、Mを有する文の最も簡單なそして普通の形は

aM＋S＋dM＋P

或は

aM＋S＋aM＋C＋dM＋P

である。

練習一六一　次の文の各成分に適當な修飾語を出來るだけ多く附せよ。

一　月が出た。

二　太郎魚を釣る。

練習一六二　「學生」といふ語が、(イ)主語、(ロ)補語、(ハ)修飾語に用ゐられた文を一つづつ作れ。

練習一六三　次の文中の形容詞的修飾語(aM)と副詞的修飾語(dM)とを指摘して、いづれの語を修飾してゐるかを述べよ。

一　可愛らしい白い小犬が樂しさうに庭の芝生の上をしきりに驅け廻つてゐる。

二　ほと〳〵と折々叩く水鷄の聲いとあはれに聞ゆ。

【九六】　なほ、文には、S・P・C・M及び文主等の成分の他に、

接續語
獨立語

書を讀み、又字を習ふ

おゝ、月が出た

のやうに、**接續語**（接續詞）や**獨立語**（感動詞及びこれに相當する語）を含むこともある。

練習一六四　次の文を先づ主部と述部とに分ち、更にそれを各成分に分解せよ。

一　驕る者久しからず。

二　明治四十五年を大正元年と改む。

三　月は秋が一番よい。

四　姫百合は風情を以て勝れたる花なり。

五　三郎や、おまへもう郵便を出したかえ。

六　新に出來た學校の花壇にも、いろ〳〵の珍しい草花が集められた。

第二五章　句及び節

【九七】　C・S・P等が一つづつでなくても、その關係が一度成立してゐるだけならば、之を一つのS、一つのC、一つのPと同等に取扱へばよい。例へば、

この繪もあの繪も綺麗だ

彼は勉强をも運動をも好めり

宅の下男はよく飲みよく食ひ又よく働く

平家は都を追はれ一の谷に潰え八島に敗れ終に壇の浦に滅びたり

等の文は二つ以上のS・C・Pを有してゐるやうに見えるけ

れど、それは一つの他の成分に對して共同のSなり、Cなり、Pなりをなしてゐるので、相互の關係はやはり

S＋P　S＋C＋P

の場合と變らないのである。

練習一六五　次の文を先づ主部と述部とに分ち、更にそれを各成分に分解せよ。

一　太郎と次郎とは兄弟なり。

二　主人も客も一しよにあはゝと笑つた。

三　三年啼かず、飛ばず。

四　世に其角・嵐雪・去來・丈草・杉風・許六・支考・野坡・北枝及び越人を蕉門の十哲といひます。

五　吾人は更に高遠なる理想を樹て、而して其の實行を期せざるべからず。

六　賴朝直ちに範賴をして勢多に向ひ、義經をして宇治に向はしめぬ。

【九八】　然るに、

イ　「おまへが口を出すのは」まだ早い

ロ　光陰は「水の流るゝが」如し

ハ　「雪舟の描いた」畫はこれだ

ニ　「天氣晴朗なれども」波高し

のやうな文を見ると、「　」内の部分は、（イロ）ではそれぞれ「早い」、「如し」といふPのSをなし、Cをなしてをり、（ハ）では「畫」といふSのMを、（ニ）では「高し」といふPのdをなしてゐる。そして（イ）（ロ）（ハ）（ニ）のいづれの「　」内の部分も亦各S＋Pといふ

句

形を含んでゐる。ただ獨立した文でないだけである。かくの如く、S＋Pといふ形を備へ（或は一方が略せられてゐることもある。）ながら、獨立を失つて他の文の一部分となつてゐる時、之を句と名づける。句も亦語と同じく、SにもCにもMにもなり得ることは前の例の通りである。

で、句を含んだ文はつまり、S＋Pの關係が二回以上成立してゐるのである。（文主を有する文も同樣である。）

●句がdMとなる場合は「ば」「ども」「とも」「も」「や」「て」等の助詞で、下の本文と接續せしめられるのが普通である。

〔無理が通れば〕道理が引込む

〔終日待てども〕友は來らず

〔天敵來襲すとも〕我は恐れじ

節

〔開會の時刻迫るも〕集まる者僅かに數名のみ

〔日露の役起るや〕氏は直ちに總司令官に任命せられたり

〔雨降つて〕地固る

〔注意〕句がS̊C̊M̊a等となる場合にとる助詞は、大抵語の場合に準じて知るがよい。

【九九】又、

イ〔禍は口より出で〕〔病は口より入る〕

ロ〔春去り〕〔夏往き〕〔秋過ぎ〕〔冬來る〕

のやうな文では、S＋Pの對立で、各の〔　〕〔丙の部分の價値は同等であつて、一方が他方の附屬でないから、句ではない。この各の部分を節と名づける。

〔注意〕この場合最後の節のPのみ終止形を用ゐその他は動詞形

容詞の連用形形容動詞の「あり」に連らぬ原形で次の節に接續し、（「て」・「して」・「ば」などで接續することもある。）又最後の節のPに附するだけで助動詞は略せられることが多い。

「風靜かに」「波穩かなり」

「松青うして」「砂白し」

「第一軍は鎭南浦に上陸し」「第二軍は鹽大澳に上陸したり」

右の事は共同述語の場合に就いても全く同じである。（九七參照）

【注意】助詞「て」「ば」等で下の文に接續せられる場合、それが句であるか節であるかは意味の上で、上の部分が下の文の條件理由をあらはす時と、上下對等である時とによつて定めればよい。

「雨降つて」（句）地固まる

「燕去つて」（節）雁來る

「君が行けば」（句）僕も行くよ

「鯉も居れば」（節）金魚も居る

練習一六六

次の文中の「　」内の分は句か節か。句ならば文の成分としての役目は何か。

一　「能ある」「鷹は爪を隱す。

二　「霜は軍營に滿ちて」「秋氣清し。

三　曉に見る「千兵の大牙を擁するを。

四　「使の來るのが」「遲いなあ。

五　「義は金鐵よりも堅く」「死は鴻毛よりも輕し。

六　「大風吹けば」「桶屋が喜ぶ。

七　「歌ふものもあれば」踊るものもある。

八　「用があつたら」手を鳴らします。

九　「月霜の如く地に冴え」風海の如く空に吼ゆ。

第二六章　文の種類

【一〇〇】文は、構造上からは、次の三種に分類することが出來る。

一　**單文**（英文法のSimple Sentenceに當る。）主語・述語の關係が唯一度成立つてゐる文。

花咲く

この繪もあの繪も綺麗だ

二　**複文**（英文法のComplex Sentenceに當る。）一つ以上の句を含み、主語・述語の關係が二回以上成立つてゐる文。

花咲けども鳥歌はず

合文と呼ぶ人もある。

三　**重文**（英文法のCompound Sentenceに當る。）二つ以上の節を有する文。

花咲き鳥歌ふ

水は方圓の器に從ひ人は善惡の友による

日本人は毛髪が黑い

【一〇一】又、性質上からは、文は次の四種に分類することが出來る。

一　**平敍體**（英文法のDeclarative Sentenceに當る。）

花咲く

花咲けども鳥歌はず

二　**疑問體**（英文法のInterrogative Sentenceに當る。）（反語の文をも含む。）

君はいつ出發するのだ

精神一到何事か成らざらむ

文の解剖

三　感動體（英文法のExclamative Sentenceに當る。）

壯なるかな言や

ほんとにお氣の毒なことだねえ

四　命令體（英文法のImperative Sentenceに當る。）

汝自身を知れ

無用の者猥りに入るべからず

しかし、普通は右の三種四體の混合した複雜した形であらはれる場合が多い。

【一〇二】文を、主部と述部とに分ち、その各部を更にその成分に分解し、且その文が構造上及び性質上如何なる種類のものであるかを説明することを、文の解剖といふ。

今試みに次の文を解剖して見よう。

（一）谷間の黑みからだん〳〵こちらへ迫つて來る黃昏の色を忙しい機の音が招き寄せる

主部　忙しい機の音が　aM　aM　S

述部　谷間の黑みからだん〳〵こちらへ迫つて來る黃昏の色を　招き寄せる　dM　dM　dM　aM　aM　aM　C　P

平敍單文

（二）父父たらずとも子は子たらざるべからず

主部　子は　S

述部　父父たらずとも　子たらざるべからず　dM　C　P

句　父父たらずとも　S　C　P

命令複文

練習一六七　次の文は構造上及び性質上如何なる種類に屬するか。

一　綺麗な葉を裏返せば毛蟲が居る。

二　脆きは人の心なるかな

三　汝は潮の干滿と月の盈缺との關係を知れりや。

四　汝は潮の何故に干滿するかを知るか。

五　夜來の微雨全く霽れて新樹更に綠を加ふ。

六　世の中に正直が勝たなければ勝つものはない。

七　來れ我黨の士。

八　如何御消光被遊候哉。

九　東寺の塔は我を迎へて立ち賀茂川の水は我を迎へて歌ふ。

一〇　人麿は赤人が上に立たむこと難く、赤人は人麿が下に立たむこと難くなむありける。

練習一六八　次の文を解剖せよ。

一　日暮れ道遠し。

二　天は勉强する人には勉强せざる人の到底想像し得ざる利益と快樂と嘉賞とを與ふ。

三　ボートもやつた。テニスもやつた。遠足もあつた。試驗もあつた。あゝ、一年は夢であつた。

練習一六九　次の文中の主語及び述語を、又句あらば

次にその句中の主語及び述語を指摘せよ。

一　新月が枯林の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。

二　我が固有の民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし。

三　今日は、夕方裏の畑の方へ散歩に出かけた。よく晴れた日が斜に野一ぱいに照り輝いてゐた。農夫の動かす鍬があちこちできら〳〵と光る。昨日の收獲の跡を働き返してゐるのだ。

第二七章　呼應附係結

【一〇三】文を結ぶには、Pが用言若しくは活用連語である場合は、終止形を用ゐるのが普通である。

花咲く

花も美し

花さへ散りけり

【一〇四】しかし、上に意味を強める助詞「ぞ」「なむ」又は疑問の助詞「や」「か」があるときは、連體形を以て結ばねばならぬ。

花ぞ咲く

花なむ美しき

花ぞ散りける

風や吹くらむ

誰か知るべき

【一〇五】又、上に「こそ」があるときは、已然形で結ぶ。

花こそ咲け（命令の「咲け」ではない。）

花こそ美しけれ

係
結

花こそ散りけれ
風こそ吹くらめ

【一〇六】　この「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」等を係と名づけ、これに應じて下に來る連體形なり已然形なりの語を結と名づける。古文では、この係結の法則は嚴重に守られてゐた。

●但し、結の略せられてゐる文があり、又句になつてゐる場合の係は、本文の結には變化を與へぬのである。

はるばると川に臨める眺望いと面白くなむ（ありける）

御賞美こそあるべきに御勘當とは情なし

●又、現代の口語では係結は無い。「こそ」は用ゐられるが結には變化を與へない。

それこそ幸だ

練習一七〇　左の文の係結を説明せよ。

一　山里は冬ぞ淋しさまさりける。

二　散ればこそいとど櫻はめでたけれ。

三　泣く〳〵なむ歸り來にける。

四　さても慨かはしき事どもにこそ。

五　聲聞く時ぞ秋は悲しき。

六　春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくゝる。

七　兄にて候ふ義朝などこそ駈け出でむずらめ。清盛などがへろへろ矢何ほどのことか候ふべき。

八　そのほどにぞ、攝政殿をはじめ前の太政大臣・左大臣・内大臣より下、殘なく人々まゐりつどひ給ふ。

【一〇七】　文には、なほ、種々の言ひ出しに對してそれぞれ適

呼應

當な結方を用ゐねばならぬものがある。これを**呼應**といふ。（係結もつまり呼應の一種である。）

況や人間に於てをや

宜なるかな芳名を千載に殘ししこと

希はくは御一讀の榮を賜はらんことを

計らざりき旗鼓の間に相見えんとは

如かじ退いて己を守らんには

豈驚歎せざるを得んや

須らく獨立自活の精神を養ふべし

秀吉をして今十年の壽あらしめば如何

これらは慣例に從つて、誤らぬやうに心がけねばならぬ。

又Pを上に出したことを忘れて、もう一度之を繰り返したり或はCの形であるべきをPのやうにしてしまつたりする誤をせぬことにも注意せねばならぬ

練習一七一　左の文を正しい形に書き改めよ。

一　況や國家存亡の秋なり。

二　然らば何を以てか此の資に充つ。

三　予をして切齒扼腕せしも一再ならず。

四　それで昔からも言つてゐます通り、公共心は國家、社會成立の基礎だと言つてゐます。

五　豈歎ずべきの至なるをや。

六　騎虎の勢一轍に、止り難きぞ是非もなし。

七　思はざりき、今日この光榮に浴したり。

八　憾むらくは大事すでに去れり。

九　須らく正々堂々たれ。

一〇　古人既に曰く「失敗は成功の基也」といへり。

一一　安んぞ優劣を論ずるを得ず。

一二　今後益、國民をして自覺せねばならぬ。

一三　記せよ、日本は最早東洋の日本に非ずして、世界の日本なり。

一四　吾人の責任や重且大豈奮勵努力すべけんや。

一五　貧家に生れたるこそ幸なりと古聖も言はれたれ。

復習一七

練習一七二　文の成分の排列の上に於て國語に特有な點を述べよ。

練習一七三　例を擧げて「なむ」といふ詞のあらゆる用法を示せ。

練習一七四　左の歌の中の「とりしか」は如何なる語法か。之を「とりしが」と讀むときは、意義・語法に如何なる差違を生ずるか。

昨日こそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く。

練習一七五　左の古文を口譯せよ。

一　こゝには大納言殿のとこそおはせしか、此の妻戸をばかくこそ出で入りし給ひしか、あの木をば自らこそ植ゑ給ひしかと、唯父の事のみ戀しげにこそ宣ひけれ。

二　思ひきやみ山の奥に住居して雲居の月をよそに見むとは。

三　道理と僻事とをならべむに、いかでか道理につかざるべき。

四　明日は遠國へ赴くべしと聞かむ人に、心しづかになすべからむわざをば、人言ひかけてむや。

練習一七六　左の文中の一線を附した用言或は活用連語の、文の成分としての役目は何か。（若し述語ならばその主語を、修飾語ならばそれによつて修飾せられる語を指摘せよ。）

一　黑い波は空にも映る。一點の黑雲が彼の波の空に湧く。彼方にも湧く。此方にも湧く。彼方にも廣がる。此方にも廣がる。その夜は曇つてゐた上に、もう月か此の背後の山に落ちたと思ふ頃……

湖は暗い。此の時遙に一點の光をば認める。其の光は搖れる。風の吹く度に搖れる。波の音する度に搖れる。鐘の音に搖れる。櫓拍子の音に搖れる。囁くやうな人聲に搖れる。光は搖れる、さうして其の光は近づく。其の光は近づく、さうして其の光は搖れる。忽ち漆黑の闇の中に浮彫の如く畫き出されたものは一艘の船である。

廣々と際限なき闇を額縁にして、其處に明るい一艘の船がある。今は櫓拍子の音も聞えない。搖れ、且搖れる光もない。唯白畫の如く明るい一艘の船が暗い闇の中に浮かんでゐる。

二　日頃の行幸に事かはりて、鳳輦は數萬の武士に打圍まれ、月郷雲客は怪しげなる籠輿傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ河原を上りに六波羅へと急がせ給へば見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。

練習一七七　次の文を解剖せよ。

一　この最も簡便な方法をおまへはなぜ選ばなかつたか。

二　一旦事あらば吾人は身命を捧げて國家を防護すべし。

三　空全く晴る。日影一しほまばゆし。松の枝はおのづとはねあがり、軒の雫こゝかしこより垂る。庭の雪は犬の足跡より消えそめて、野も山もやがてもとの姿となる。風猶寒し。

練習一七八　左の文の誤を正せ。

一　猛き兵士の胸にも別離の悲哀に滿たされしならむ。

二　數學の時間に因數分解を致しましたが、それには如何に公式の應用が必用であるかといふ事が今更深く感じました。

三　我が國の美風をして益〻發揚せざるべからず。

四　教育の普及を計つて、今後の世界的競爭に負を取らない國民を養成に努めねばならぬ。

五　いくら馬鹿な僕だつて、そんなにおだてたりけなされたり、玩具にしてたまるものか。

六　大丈夫當に瓦全を恥づ。

七　將に驚天動地の活劇が演ぜられる時に、休戰ラッパが高く鳴り渡つた。

八　恐らくは我彼に及ばず。

九　蓋し今日の急務なり。

一〇　されど敵國の慘狀を見れば、一掬の涙なきにあらずや。

一一　思へ、幾百幾千の同胞が實に血を流し骨を抛ちて獲たるなり。

一二　吾等青年たる者宜しく固有の武士道を發揮せざるべけんや。

一三　堪へ難き困苦に堪へ、忍び難き憂患を忍べば、如何なる事か成るなからん。

一四　何ぞ緊褌一番せざらんや。

一五　忍耐の德を缺かざらんか、いかでか最後の勝利を收むるを得べし。

日本新文典下卷終

附錄　文法上許容ニ關スル事項

一　「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

二　「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三　過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例　火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四　「コトナリ」「異」ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

五　「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　手習サス

周旋サス

賣買サス

六　「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 罪サル
評サル
解釋サル

七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム
上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ塲合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ
攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九 てにをはノ「ノ」ハ動詞,助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例 花ヲ見ルノ記
學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ
市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞,形容詞,助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例 有ルヤ
面白キヤ

一一 父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

二 てにをはノ「トモ」ノ動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 數百年ヲ經ルトモ
如何ニ批評セラルヽトモ
强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

三 てにをはノ「ト」ノ動詞,使役ノ助動詞,受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 月出ヅルト見エテ
嘲弄セラルヽト思ヒテ
終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ
萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

三 語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ

語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例　月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解生ズベキ例

史記ト漢書ト・ノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳ト・ヲ讀ムベシ

一四　上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例　誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

一五　てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

例　何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)(スレドモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(クトモ)(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ

一六　「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例　イハユル哺乳獸ナルモノ

顏回ナルモノアリ

カード三枚入

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承諾セラルルモノハ、德川時代國學者ノ研究ニ基キ、專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ之ニノミ依リテ、今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ、破格、又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ、中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ、文部省ニ於テハ、從來、破格、又ハ、誤謬ト稱セラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ、之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ、同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ、編纂ノ場合ニモ、之ヲ應用セントス。（明治三十八年十二月二日　文部省告示第百五十八號）

品詞一覽

名詞　内閣總理大臣　高さ　第四號　もの（物・者）　コロッケ　こと（事）　笑

代名詞　わ　かれ　どちら　何　そいつ　貴殿

動詞　有り（る）　笑ふ　用ゐる　蛇蝎視す（する）　うち棄つ（てる）

形容詞　無し（い）　高し（い）　甚だし（しい）　靜けし　馬鹿々々し（しい）

助動詞　なり　た　む　られる　如し

副詞　甚だ　甚だしく　謹んで　靜かに　さら〳〵と

接續詞　或は　且又　そして　加之　處　條

助詞　と　て　にて　より　ばや　かな

感動詞　すは　やい　へゑ　さあ〳〵　南無三

動詞所屬一覽

	文語	口語
加行變格	來	來る
佐行變格	爲（おはす）（國語の名詞・漢語・洋語、及び副詞と「す」との複合語）	爲る
奈行變格	死ぬ（四段にも用ゐる）　往ぬ	
良行變格	有り（四段にも用ゐる）　侍り（形容動詞）	
下一段	蹴る	同上（四段にも用ゐる）
上一段	著る　似る　煮る 干る　見る　顧る 鑑る　惟る　射る 鑄る　居（ゐ）る（波行上二段にも用ゐる）　率ゐる 用ゐる	同上

右の外の動詞中

下二段	未然形「エ段」なるもの	下一段
上二段	未然形「イ段」なるもの	上一段
四段	未然形「ア段」なるもの	同上

山師三之三　天野二郎有所品

文語助動詞活用一覽

一　動詞型活用の助動詞

種類	動詞活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身・可能・敬語	（未然）（打た）（尋ね）	れ	れ	る	るる	れ	れ	四・奈變・良變に右以外の動詞に
	（未然）（尋ね）	られ	られ	らる	らるる	られ	られ	
使役・敬語	（未然）（打た）	せ	せ	す	する	すれ	せ	四・奈變・良變に右以外の動詞に各動詞に
	（未然）（尋ね）	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ	
	（未然）（打たね）	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ	
指定	（連體）（打つ）（學生）	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	體言及び用言に體言のみに
		たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	
時	（連用）（打ち）（尋ね）	て	て	つ	つる	つれ	て	各動詞に但し「ぬ」の活用のみは奈變に連らぬ
		な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	
		たら	たり	たり	たる	たれ	○	
		けら	けり	けり	ける	けれ	○	
	（命令）（書け）	ら	り	り	る	れ	○	四・佐變・奈變のみに
推量	（終止）（打つ）（尋ぬ）	○	○	めり	める	めれ	○	各動詞に但し良變は連體形に
詠嘆	（終止）（尋ぬ）	○	○	なり	なる	なれ	○	各動詞に但し良變及び良變型助動詞は連體形に各動詞及び助動詞「なり」に
	（連用）（尋ぬ）（なり）	○	○	けり	ける	けれ	○	

二　形容詞型活用の助動詞

種類	動詞活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
推量	（終止）（打つ）（尋ぬ）	べ	く	べ	し	べ	き	○	各動詞に但し良變は連體形に
		く	べ	く	べ	し	べ	け	れ		
打消	（終止）（打つ）（尋ぬ）	ざ	ざ	じ	ず	じ	ざ	ざ	じ	○	
		じ	く	じ	く	じ	ま	じ	き		
		ざ	じ	ざ	じ	ざ	じ	き	け	れ	
比況	（連體）（打つ）（尋ぬる）（が）（矢の）（が）	ど	と	く	ど	と	く	ど	と	し	ど	と	き	○	○	用言に又は動詞「が」「の」の下に
願望	（連用）（打ち）（尋ね）	た	く	た	く	た	し	た	き	た	け	れ	○	各動詞に

三　特殊の活用をなす助動詞

種類	動詞活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
打消	（未然）（打ち）（尋ね）	ず	ず	ず	ぬ	ぬ	○	各動詞に
		○	○	じ	じ	ね	○	
時	（未然）（打ち）（尋ね）（連用）	○	○	む	む	め	○	各動詞に加變佐變は除外例
		○	○	き	し	しか	○	
推量	（未然）（打ち）（尋ね）（終止）	ま せ	○	○	○	○	○	各動詞に
		○	○	ま し	ま し	ま し か	○	各動詞に、但し良變は連體形に
推量	（終止）（打つ）（尋ぬ）（連用）（打ち）（尋ね）	○	○	ら む	ら む	ら め	○	各動詞に（但し良變は連體形に
		○	○	け む	け む	け め	○	各動詞に

動詞活用一覽

来る きたる きたれ きたれ

(上ゴリ)

種類	語幹／活用	四段							変態	変態	上二段							上一段						
		咲	押	打	笑	飲	語		有	死	起	落	強	試	報	懲		著	似	干	見	射	居	
文語	未然	か	さ	た	は	ま	ら		ら	な	き	ち	ひ	み	い	り		き	に	ひ	み	い	ゐ	
	連用	き	し	ち	ひ	み	り		り	に	き	ち	ひ	み	い	り		き	に	ひ	み	い	ゐ	
	終止	く	す	つ	ふ	む	る		り	ぬ	く	つ	ふ	む	ゆ	る		きる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	
	連體	く	す	つ	ふ	む	る		る	ぬる	くる	つる	ふる	むる	ゆる	る		きる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	
	已然	け	せ	て	へ	め	れ		れ	ぬれ	くれ	つれ	ふれ	むれ	ゆれ	れ		きれ	にれ	ひれ	みれ	いれ	ゐれ	
	命令	け	せ	て	へ	め	れ		れ	ね	き	ち	ひ	み	い	り		き	に	ひ	み	い	ゐ	
口語	未然	か	さ	た	は	ま	ら		ら	な	き	ち	ひ	み	い	り		き	に	ひ	み	い	ゐ	
	連用	き	し	ち	ひ	み	り		り	に	き	ち	ひ	み	い	り		き	に	ひ	み	い	ゐ	
	終止	く	す	つ	ふ	む	る		る	ぬ	きる	ちる	ひる	みる	いる	りる		きる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	
	連體	く	す	つ	ふ	む	る		る	ぬ	きる	ちる	ひる	みる	いる	りる		きる	にる	ひる	みる	いる	ゐる	
	已然	け	せ	て	へ	め	れ		れ	ね	きれ	ちれ	ひれ	みれ	いれ	りれ		きれ	にれ	ひれ	みれ	いれ	ゐれ	
	命令	け	せ	て	へ	め	れ		れ	ね	き	ち	ひ	み	い	り		き	に	ひ	み	い	ゐ	
種類		四段									上二段							上一段						

山口師 二年三之組 天野二郎所有品

yamoguchi nomaluwupool ! ; amenu

い 死特居有 り

形容詞活用一覽

活用／語根		文語	口語
未然	美し	く	く
連用	清	く	く
終止		し	○
連體		き	き
已然		けれ	けれ
未然		く	く
連用		く(う)	く(う)
終止		い	い
連體		い	い
已然		けれ	けれ

下一段(蹴)	下二段											下一段	加變(來)	佐變(爲)
	植	流	絶	改	堪	尋	企	馳	受	(得)				
け	ゑ	れ	え	め	へ	れ	て	せ	け	え	ゑ	け	こ	せ
け	ゑ	れ	え	め	へ	れ	て	せ	け	え	ゑ	け	き	し
けるる	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	う	け	く	す
けるる	うる	るる	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる	うる	うる	け	くる	する
けれれ	うれ	るれ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ	うれ	うれ	け	くれ	すれ
け	ゑ	れ	え	め	へ	れ	て	せ	け	え	ゑ	け	こ	せ
け	ゑ	れ	え	め	へ	れ	て	せ	け	え	ゑ	け	こ	しせ
け	ゑ	れ	え	め	へ	れ	て	せ	け	え	ゑ	け	き	しし
けるる	ゑる	れる	える	める	へる	れる	てる	せる	ける	える	ゑる	けるる	くる	するする
けるる	ゑる	れる	える	める	へる	れる	てる	せる	ける	える	ゑる	けるる	くる	するする
けれれ	ゑれ	れれ	えれ	めれ	へれ	れれ	てれ	せれ	けれ	えれ	ゑれ	けれれ	くれ	すれすれ
け	ゑ	れ	え	め	へ	れ	て	せ	け	え	ゑ	け	こ	しせ
下一段												加變		佐變

口語助動詞活用一覽

一　動詞型活用の助動詞（接續の特に記してないのは文語の場合に準じて考へればよい）

種類	動詞活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身	（未然）〔打た〕	れ	れ	れる	れる	れれ	れ	
可能								
敬語	（未然）〔尋ね〕	られ	られ	られる	られる	られれ	られ	
使役	（未然）〔打た〕	せ	せ	せる	せる	せれ	せ	
敬語	（未然）〔尋ね〕	させ	させ	させる	させる	させれ	させ	

二　形容詞型活用の助動詞

種類	動詞活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
推量	（一止）〔打つ〕〔尋ねる〕	らしく	らしく	らしい	らしい	○	○	各動詞に、但し其變は連體形に
願望	（連用）〔打ち〕〔尋ね〕	たく	たく（ゝ）	たい	たい	たけれ	○	
打消	（未然）〔打た〕〔尋ね〕	○	なく	ない	ない	なけれ	○	各動詞に

三　特殊の活用をなす助動詞

種類	動詞活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
打消	（未然）〔打た〕〔尋ね〕	○	○	ぬ（ん）	ぬ（ん）	れ	○	
時	（連用）〔打つ〕〔尋ね〕	○	て	た	た	○	○	
指定	（終連）〔打つ〕〔尋ねる〕〔學生〕の	○	で	だ	○	○	○	體言のみに又は助詞「の」の下に

平假名―正
片假名―誤
[illegible]―許容

「きしいか」の連續

活用種類	原形	未然	連用	終止	連体	已然	命令
サ行四段	す示	さ	しき しか	す	す	せ [illegible]	せ
サ行下二	す寄	せ	せしき しか	す	する	すれ	せ
ザ変	す罪	せ じ ふ	しき シカ	す	する	すれ	せ
加変	来	こしか き	き こい き	く	くる	くれ	こ
下二	教	へ	へり	ふ	ふる	ふれ	へ

ふる
ふれ

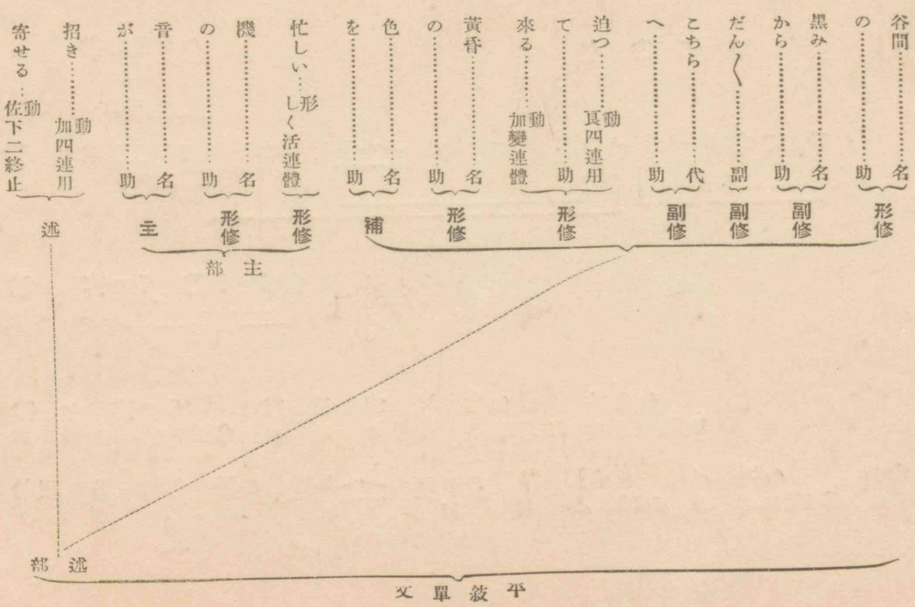
解剖

谷間（名）の（助）黑み（名）から（助）だん〳〵（副）こちら（代）へ（助）迫つ（動、瓦四連用）て（助）來る（動、加變連體）黃昏（名）の（助）色（名）を（助）忙しい（形、しく活連體）機（名）の（助）音（名）が（助）招き（動、加四連用）寄せる（動、佐下二終止）

主部　忙しい（形修）機の（形修）音が（主語）

述部　谷間の（形修）黑みから（副修）だん〳〵（副修）こちらへ（副修）迫つて來る（形修）黃昏の（形修）色を（補語）招き寄せる（述語）

平叙單文


谷間……名
の……助
形修
黒み……名
から……助
副修
だん〳〵……副
副修
こちら……代
へ……助
副修
迫つ……動
て……助
眞四連用
形修
來る……動
加變連體
黄昏……名
の……助
形修
色……名
を……助
補
忙しい……形
しく活連體
形修
機……名
の……助
形修
音……名
が……助
主
主部
招き……動
加四連用
寄せる……動
佐下二終止
述
述部
平敍單文

大正十年九月十日印刷
大正十年九月十五日發行
大正十年十二月十三日訂正再版發行

日本新文典
定價 上卷金參拾六錢 下卷金參拾六錢

大正十四年度臨時
定價 上卷金六拾五錢 下卷金六拾五錢

不許複製

編者 藤村作
編者 島津久基
發行者 東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 佐藤幹枝
印刷者 東京市京橋區弓町二十五番地 高橋郁

發行所 東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
電話青山三五四六番
振替口座東京二九五〇七番
至文堂

弊堂發行の教科書は供給差支無き樣常に澤山製本出來準備致居候間若し各地書店に品切れ等にて御差支有之候節は何卒弊堂へ直接御注文被下度直に送本可申上候

(三協印刷株式會社印刷)

山口师範学校
天野二郎

山口師範

天野二郎